

## 英雄たちの最期

1919年、カランサは二人の革命指導者を葬った。エミリアノ・サパタとフェリペ・アンヘレスである。

サパタ討伐軍総司令官パブロ・ゴンザレスはクアウトゥラまで進出して、何ら戦果を上げられないまま二度目の春を迎えていた。焦ったゴンザレスはサパタ暗殺の機会を狙っていたが、好機が訪れた。部下のヘスス・グアハルド大佐にサパタ軍へ寝返る振りをさせ、サパタに近づいて暗殺させる計画を立てたゴンザレスは、カランサの承認を得て、実行に移した。

命令を受けたグアハルドはサパタをチナメカ・アシエンダに誘き寄せ、彼が門に入ろうとするところを二発の銃弾を打ち込んで暗殺した。ゴンザレスは葬儀を大々的に宣伝するため、埋葬が行われる4月12日の夕刻には、墓地に撮影機まで持ちこんだ。多くの者にサパタの遺体を見せ、サパタの死を納得させることにより、サパタ信奉者が政府への抵抗を諦め、村人が彼らへの協力を思い止まることを期待した。周辺の村々からサパタの姉妹二人と千人に近い貧しい人々がやって来た。皆棺を覗き込んで身体を震わせて泣き崩れた。それでも多くの人々はサパタがまだ生きていると信じていた。サパタ軍の勢いが一向に衰えないことに、ゴンザレスは落胆した。カランサはこの事件を封印するかのよう、グアハルドを准将に昇進し、5万ペソの賞金を与えた。<sup>1</sup>

二人目の犠牲者はフェリペ・アンヘレスであった。アンヘレスは北部師団が解散するとアメリカに逃れていたが、1918年12月、再び革命の理想を掲げてピヤのもとに帰ってきていた。しかし、ピヤに幻滅したアンヘレスは1919年の春、パンチョ・ピヤと決別した。アンヘレスがカランサに狙われることを心配したピヤは七人の部下をアンヘレスにつけた。それから七ヵ月後、昔のピヤの部下に密告され、アンヘレスは捕らえられた。カランサは公開の軍法会議を開き、合法を装った。

メキシコ革命で唯一大きな公開裁判となったアンヘレス裁判は、カランサにとって様々な点で逆効果であった。パラルやフアレス市では、アンヘレスに味方する大勢の群集が、彼を一目見ようと駅に押しかけた。11月26日、軍法会議はチワワ最大の劇場、テアトロ・デ・ロス・エロエスで開かれた。法廷に入りきれない市民数千人が劇場を取り巻いた。アンヘレスはメキシコ政府と憲法に対する不服従と反逆罪に問われた。アンヘレスの政治的反論は、チワワの人々の琴線に触れ、強烈な印象を与えた。アンヘレスはカランサ政府を糾弾するのではなく、平和と和解を呼びかけ、彼がメキシコに戻った目的を何度も繰返し述べた。戦争、動乱、革命に疲れ切った人々は、アンヘレスに共鳴した。<sup>2</sup>

カランサは二日で裁判を終えることにしていた。アンヘレスは連邦軍に属していないので、軍法会議の権限外であることを主張したのを押し切れ、政府と憲法への反逆罪として死刑の宣告を受けた。執行までの間、僅か二日しかなかったのにも関わらず、カランサからの報復を覚悟の上で、千人以上のチワワ住民が嘆願書に署名した。アンヘレスは自分で場所

を選び、静かに銃殺隊と向き合った。3

1920年選挙の前年、カランサの時代遅れは益々顕著となっていた。国は未だ混沌とし、困ったことに新しく政治の実権を握ったものは、私腹を肥やすことに専念していた。カランサ自身は潔癖であったが、カランサという言葉は盗むと同義語になっていた。この頃、自分の後を狙っているオブレゴン、ポルフィリオ・ディアスのようにになると予見したカランサは、後継者を民間人とすることでオブレゴンに挑戦状を叩き付けた。

選ばれたワシントン駐在大使イグナチオ・ボニヤはオブレゴンと同じソノラ出身で、カランサは明らかに本拠地におけるオブレゴンの勢力を二分しようとした。当時実権を握っていたのはカランサではなく、団結したソノラ出身のジェネラルたちで、彼等はウエルタのクーデター以来、グアダルペ計画の下で革命に決定的な影響を与えてきた。彼等から一様にリーダーと認められていたオブレゴンはカランサが選挙を不正に操る前に、反乱を起すことを明言していた。1920年4月、オブレゴンとソノラのジェネラルたちはアグア・プリエタ計画を発表し、カランサ政権を否定して革命再開を宣言した。4

ケレタロ憲法会議以来カランサと急進的な有識者あるいはソノラのジェネラルたちとの間の決着は既についていた。彼等は元老の訓戒などには一切耳を貸さなかった。カランサはそれを充分理解していた。カランサにとって、自分の命より大事なものは、原則を守り通すことであった。カランサは反乱軍に押されて首都を離れ、再びベラクルースへ行く決心をした。

翌日、脱出の準備がはじめられ、人、武器弾薬、書類、所持品、ありったけの金の延べ棒などを載せた客車や貨車の数は六十両に上った。カランサにとって、自らの命を守ることは重要ではなく、重要なのは国家のために行動することであった。彷徨えるカランサ政府は、主都郊外のピヤ・デ・グアダルペで最初の攻撃を受けた。それから駅を通過するごとに新たな恐怖が襲った。

5月14日、アルヒベス駅でジェネラル・グアダルペ・サンチェスの攻撃を受けた。ジェネラル・フランシスコ・ウルキソは襲撃の最中、大統領車に行き、何度も列車から逃れるよう進言したが、カランサは大混乱となった車内で平然として動かなかった。ジェネラル・ムルヒアは無理やりカランサを連れ出して馬に載せた。ベラクルースへの道は閉ざされ、彼らは北に向かった。このような悲惨な状況にもかかわらず、カランサは冷静で不屈の精神を漲らせていた。5

最後までカランサと行動を共にしたマリエル、ムルヒア、バラガンなどのジェネラルに混じって一人の日本人がいた。その名は山根善三郎である。彼は、オブレゴンが反旗を掲げたときにサルティヨにいたが、カランサから急遽首都へ呼び出され、カランサの参謀としてオブレゴンと対峙したが、形勢利あらず、カランサの傍らに寄り添うようにしてベラクルースに向かう列車に乗った。6

5月20日、すでに六日も歩き続けていた。目指すはジェネラル・ロドルフォ・エレロ

が支配する地域であった。以前は叛乱者であったエレロは、数週間前カランサ政府から恩赦を受けていた。エレロは巧みに媚びへつらって、辺鄙な村トゥラスカラトンゴまで行き、そこで一夜を過ごし、さらに北方へ偵察に出かけたジェネラル・マリエルの報告を待つことを薦めた。朝一時、弟が近隣の村で負傷したため行かなくてはならない、と突然エレロが言い出した。皆はすぐ怪しいと思ったが、カランサは「神は我等と共にある」とつぶやいただけであった。

カランサは、その夜寝付けなかった。三時、ジェネラル・マリエルからの使いが来て、北に向かう道は安全であることを伝えた。カランサは皆に「さあ寝よう」と言った。その頃、エレロの者たちは爬虫類のように泥の中を這ってカランサの寝ている小屋の前に向かって近づいていた。それから二十分後、雨が降りしきる闇の中、人の叫びと銃声が鳴り響いた。カランサは最初の銃撃で足を砕かれ立ち上がれなかった。「カランサに死を」の叫びと銃声の中、カランサはコルト45を取り出し、自らの胸に向かって引き金を引いた。

四日後、カランサはメキシコ市の三流墓地に葬られた。頑強な老人は長い間、厳格で聡明な父親のように革命を統括してきた。二つの世紀の架け橋であったカランサは、十九世紀改革派の原則に則り、革命の流れを導いて、果てしない混乱に落ち込むのを防いだ。埋葬の日、アグア・プリエッタ革命の民間人のトップの座にいたアドルフォ・デ・ラ・ウエルタが臨時大統領に任命された。<sup>7</sup>

パイオニア列伝によると、山根善三郎は山口県出身で、若干十九歳にして第一回満州丸でオハケニヤ砂糖耕地に移住し、三ヶ月で下痢や脚気で病床に臥し、全快とともに逃亡。暫くオリサバ近郊のアシエンダで働き、次にコアウイラ州コンキスタ炭坑で石炭と取り組んでいるうちに革命勃発となり、通信兵としてマデロ革命軍に投じ、その後マデロ政府軍としてオロスコ反乱軍と戦った。1913年、マデロがウエルタに殺されたニュースをトレオンにいる時に耳にした彼は、革命再燃を予感し、コントレラス将軍のもと、少尉として任官し、トレオン攻撃で中尉、サカテカス戦で二等大尉と躍進して、名将校の真価を遺憾なく発揮するようになった。その後カランサの元、サパタ討伐戦でプエブラに向かう途中負傷し、ケレタロで休養しているときに、カランサの近衛旅団長に抜擢された。1917年2月5日、憲法発布の日、ケレタロで近衛親衛旅団長として式典に参列した。その後はピヤ討伐軍に加わり、数々の戦功をたてた。カランサの死後、彼は終に降参し、首都に護送され、翌日ジェネラル・メンデスにより、彼の天才的軍略家たるを惜しまれ、釈放されて再び軍人となった。二十三年に及ぶ苦闘転戦の軍生活を終え、モンテレーでホテルを大々的に経営し、同市では名士として名を知らぬものがないほどの人気者であったという。<sup>8</sup>

1910年から1920年まで、暗殺されたメキシコ革命の三人の先駆者、マデロ、サパタ、カランサの三人に共通しているのは、間違った人間を信用したのが原因であった。

マデロはビクトリアノ・ウエルタの忠誠心を最後まで信じて疑わなかった。サパタは政府軍を離れてサパタ派に寝返ることを約束したヘスス・グアハルドを信じ込んでしまった。カランサはロドルフォ・エレラの忠誠心を信じ、ベラクルースへ逃れる途中殺された。過去何度も危ない目に会ってきたビヤは逆に、誰一人信じなかった。しかし、終にこの三人と同じ運命を迎えることになった。ビヤの場合は人を信じたからではなく、自分自身を過剰に信じたためである。<sup>9</sup>

1923年7月、ビヤは自分のアシエンダのあるカヌティヨから少し離れたリオ・フロリドへ、友人の子息のゴッドファーザーになるために出かけることになった。ビヤはそういった事が大好きで、しばしば役を引き受け、子供たちにたくさんの贈物をした。今度の旅行は、洗礼を受ける目的以外に、パラルにある彼の所有するホテルに住む、彼のもう一人の妻マヌエラ・カサスに会って、仕事の打ち合わせをすることになっていた。彼に対する陰謀が計画されているとの噂がビヤの耳に入っていたが、ビヤはさして気に留めなかった。そのような事は日常茶飯事であったし、オブregonやカイェスとの関係も良く、彼らの押さえが利いてか、刺客を送り込んでいたヘスス・エレラも静かになっていた。

ビヤの秘書ミゲル・トゥリヨからエスコート五十名を伴うのは経済的に負担が大きいというアドヴァイスを受け入れ、自ら車を運転し、四人だけ連れて行くことにした。しかし、彼は警告を完全に無視したわけではなく、帰路の安全を確保するため、重装備した三人の護衛をパラル近辺に待機させた。7月10日、リオ・フロリドに向かう途中パラルの町を通過した時、ベニート・ファレスとガビノ・バレダ通りの角にあるアパートの窓から、彼を狙っている数本のライフルがあることに気付かなかった。ビヤがその場所に差し掛かったとき、近くの学校から数百人の生徒が一斉に下校していて、発砲されなかった。

7月20日の朝、パラルに暫く逗留し、集金をしたビヤはカヌティヨに帰ることにした。彼はカヌティヨに連絡して、パラルの近くで待機している三人の護衛を呼び寄せた。彼はパラルでの安全は百パーセント確保したと感じていた。パラルの守備隊長フェリス・ララは彼の親友であった。ただビヤが知らなかったのは、その日、ララと彼の守備隊は近隣の町マトゥラナに、9月16日の独立記念日パレードの練習に出かけていることであった。もしビヤがそれを知ったなら、直ちに怪しいと感じたはずであった。独立記念日はまだ先の話であったし、マトゥラナの通りは狭く、坂が多くて、行進の練習には全く不向きな場所であった。

ビヤは上機嫌で、秘書のトゥリヨや護衛に冗談を飛ばしながら、自ら車を運転して、ベニート・ファレスとガビノ・バレダ通りに差し掛かったとき、その角に立っていた男が右手を上げて、「ビバ・ビヤ」と叫んだ。この叫びは彼への挨拶ではなく、暗殺者たちへの合図であった。ビヤの車が角に差し掛かり、ゆっくりと曲がるところで一斉射撃を受けた。ビヤは九発の銃弾を受けトゥリヨと共に即死、ビヤの運転手ラファエル・メドゥラノは腕と脚を撃たれ、外に出て車の下で死んだ振りをしていた。二人の護衛は近くの建物のほうへ逃げた。その一人ラモン・コントウレラスは負傷しながらも、ピストルを抜いて殺人者

の一人を撃ち殺し、唯一の生存者となった。もう一人クラロ・ウルタドは川に向かって逃れるところを射殺された。ビヤの車は四十発のダムダム弾を受けていた。

ビヤは死亡した翌日1923年7月21日、埋葬された。ビヤが望んでいたものとは程遠い葬儀であったが、二頭立ての黒い馬に引かれた馬車に載った棺のあとを、数千人のパラルの住民が続いた。さらに、師団長への荣誉として、衛兵と軍楽隊が参列したことで、ビヤは満足したに違いない。しかし、ビヤが不満に思ったであろう事は、チワワ州知事エンリケスが、ビヤが以前州都に建てた壮大な墓に埋葬することを拒んだこと、カヌティヨにいた近親者の誰一人参列することが出来なかったことである。ビヤの死を世界中のメディアは一斉に報道した。<sup>10</sup>

ビヤの暗殺から長い年月が過ぎ、オブレゴンもカイェスも共に権力の座から退いた頃、メキシコの歴史家や新聞社の調査委員などによる事件の真相解明が始められ、その全容が明らかになっている。それによると、オブレゴンもカイェスもビヤの暗殺に深く関わっていた。米国捜査局と米軍諜報部のファイルが機密解除され「カイェス＝トレブランカ古文書」と呼ばれるカイェスとオブレゴン政権時代の国防相ジェネラル・アマロに関する文書が研究者に公開されるに至って初めて、ビヤの暗殺にメキシコ政府が関与した動かぬ証拠が明るみに出た。<sup>11</sup>

ビヤは遺体となって埋葬されてからも、安らぎは得られなかった。1926年2月6日、ビヤの墓が暴かれているのをパラルにある墓地の管理人が発見した。ビヤの頭蓋骨がなくなっていた。パラルの墓地に残ったビヤの遺骸は再び掘り返され、別の場所へ移動させられた。

1976年、ルイス・エチェベリア大統領はビヤの遺骸はメキシコ市にある革命英雄記念碑が最も相応しいと考え、11月18日、パラルから厳かに掘り起こされた遺骸は首都へ移され、死後53年経って始めて公に認められ、彼が尊敬して止まなかったマデロと、彼が最も憎んだ敵カランサの横に英雄として埋葬された。<sup>12</sup>

1924年12月1日、大統領に就任したプルタルコ・エリアス・カイェスの出生は回教徒、具体的にはシリア人の血統であるとソノラ州ではしきりに噂された。彼はカトリック教会への締め付けを強め、血なまぐさいクリステロ戦争へと発展することになった。カトリック信者がカイェス政府の教会弾圧に反発し、武器を取って立ち上がったクリステロ戦争は1926年に始まり、武力による決着が付かず、エミリオ・ポルテス・ギル大統領になって、駐墨アメリカ大使ドゥワイト・ホイットニー・モロウの仲介によって1929年6月21日、やっと終焉した。その六日後、メキシコで三年近くも静まり返っていた教会の鐘が鳴った。戦争で亡くなった者は、政府側で五万七千人弱、クリステロと一般市民で三万人、合わせて9万人に達した。

隻腕のセラヤの男オブレゴンは、クリステロ戦争が荒れ狂う最中チャプルテペックのカ

イエス大統領を頻繁に訪れ、大統領返り咲きの画策を始めた。オブレゴンに比べるとドン・ポルフィリオはまだ可愛げがあった。1926年10月、上下両院は紛糾した会議を数回重ねた末、オブレゴン再選への門戸を開放した。オブレゴンは彼の野望の前に立ちはだかる反対派を逮捕しては銃殺した。この頃の政治暴力は1910から20年の頃に比べ、赤裸々で痛ましく、残忍で独断的であった。革命の目的など誰も口にせず、次々と人が殺されていった。多くの味方も敵も死に、友も敵に回った。

大統領選挙に勝利して二週間ほど経った1928年7月17日、オブレゴンの予定表には「誰かが命を狙っている」と赤字で書き込まれてあった。彼は秘書の警告を無視した。警告などは何でもなかったのであろう。彼の支持者のグループがラ・ボンビヤ・レストランで祝宴を催してくれる事になっていた。暗殺者が彼に近づいて、書き始めたばかりの彼の肖像画を見せた。良く似ていた。この男には才能があった。オブレゴンは彼にスケッチを続けさせた。楽団がソフトな音楽を奏でていた。数分後、狂信的なカトリックのホセ・デ・レオン・トラルは拳銃を取り出すなりオブレゴンの頭を撃ち抜いた。デ・レオン・トラルはオブレゴンと正反対のような男で、痩せて浅黒く、銃殺隊の前で震えた。オブレゴンは12月1日に大統領に就任する事になっていた。<sup>13</sup>

オブレゴンの死に恐れをなしたプルタルコ・エリアス・カイェスは大統領再出馬をあきらめ、分派間の内紛を収めるため政治政党を結成し革命国民党（PNR）と命名した。1929年、全国規模の革命党を創設することにより、革命に携わってきた軍人や文官を、中央でシヴィリアン・コントロールし、経済の近代化に必要な政治的安定を確立するのがカイェスの意図であった。PNRの成立は革命後の政治機構を形作る上で画期的なものであった。

カイェスは暫定大統領二人のあとにラサロ・カルデナスを任命し、このときから大統領後継者の任命制度が定着した。1934年、カルデナスが大統領に就任して始められた農地解放政策により、日本人農家も大きな痛手を蒙った。その四年後カルデナスは更に石油事業の国有化を行い、メキシコ人は独立国家としての自信を取り戻した。<sup>14</sup>

1. John Womack, Jr. "Zapata and the Mexican Revolution", Vintage Books, 1968, P322
2. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1988, P710
3. Ibid. P714
4. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P370
5. Ibid. P371
6. 村井謙一、「パイオニア列伝」、1975、P 19
7. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P372
8. 村井謙一、「パイオニア列伝」、1975、P 19
9. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1988, P761
10. Ibid. P771
11. Ibid. P775
12. Ibid. P789
13. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P403
14. Julia Preston and Samuel Dillon, "Opening Mexico, The Making of a Democracy", Farrar Straus and Giroux, 2004, P51